

「巻頭特集」過酷なウルトラマラソンで世界記録樹立
長距離ランナー

風見尚

Nao Kazami

フルマラソン以上の距離を走るウルトラマラソン。100kmもの長距離、あるいは24時間走など、定められた距離や時間で競う「鉄人レース」です。風見尚さんはウルトラマラソンの世界記録保持者。2020年世界選手権での金メダル獲得を目指し、日々練習を重ねています。

若いころに無名だったランナーが、諦めずに継続して、結果を出せた。

しかしケガに悩まされ、残念ながら4年後に退部。それでも、「陸上競技は生涯スポーツ」と考え、趣味として楽しく走ることをモットーに長距離走を続けた。

休日には、同じ元陸上部の仲間とあいち健康の森公園へ。風見さんお気に入りの練習コースで、園中心部にはジョギングコースがある。周回コースは100mごとに距離表示がされ、ランナーの走りを支える。

趣味として長距離を楽しんで1、2年が経ったころ、母親の体にガンが見つかった。

主要な大会で華々しい活躍を果たせなかった風見さんに、「もう一度がんばって、母親を励ましたい」という思いが芽生えた。長距離走仲間からウルトラマラソンの存在を聞いたのもちようどこころ。競技人口が少なく、世界大会で金メダルを狙えると考えた。

2015年、ウルトラマラソンのトレーニングを開始。6時間以上にわたるレースは天候、体調が一層大きく影響するため、フルマラソン以上に準備に時間を要する。「体だけでなく、何より大事なものは、『諦めない強い心』です」との言葉通り、精神的な強さが必要だ。

世界に「NAO KAZAMI」の名が知れ渡ったのは2018年6月。「サロマ湖100キロウルトラマラソン」を6時間9分14秒で優勝。それ

までの世界最高記録（日本記録）6時間13分33秒を20年ぶりに更新した。長距離界で目立つ存在ではなかった風見さんは、走り続けることで世界記録保持者に。1日にして世界の陸上界に躍り出た。

「周りの反響は大きかったです。でも母親には出場を伝えていなかった。『優勝？』といったように、反応は小さかったです」と笑う。国内での記録がなかった息子が、急に世界記録保持者となった。現実を整理するのに、時間がかかったようだ。

初めてウルトラマラソンに挑戦したのは2015年のサロマ湖。残念ながら途中棄権に終わったが、次の17年は3位とステップアップ。そして3回目のサロマ湖挑戦で、快挙を成し遂げたのだ。さらに、2019年6月には南アフリカで開催されたウルトラマラソン「コムラッズマラソン」に出走。2万人のランナーが競う大会で東洋人初の3位表彰台を獲得した。86・83kmを走り切り、注目的となった。

風見さんはフルタイムで働く会社員である。毎朝4時30分に起床して練習に出る。終業後も走り込み、夜だけで40km以上を走ることもある。次に掲げる目標は2020年9月にオランダで開かれる世界選手権での

優勝。ウルトラマラソン世界記録保持者であるが、世界選手権での優勝経験はない。名実共に世界一といえるよう、来年のサロマ湖大会で4位以内に入学し、世界選手権への出場資格を得ることが不可欠だ。

「取材も増えて、周りの期待を実感しています。若いころに無名だったランナーが、諦めずに継続して、結果を出せた。そういったことを伝えられたらうれしい」と風見さん。昨年、結婚した妻の食事が心身をサポートしてくれているという。まさに二人三脚で世界に挑む。



1 愛三工業陸上部所属ではないが、今も企業名が入ったユニフォームで出走。会社も選手としての風見さんを応援している。2 南アフリカのコムラッズマラソンは、現地ではお祭り騒ぎになるスポーツイベント。あくまで一人の市民ランナーとして参加したが、世界記録保持者として厚い歓迎を受けた。3 アジア圏の選手としては、初めての3位表彰台を獲得。世界記録をもつランナーとしても大いに注目された。4 コムラッズマラソンのコースは約86km。盛り上がりを反映するように、沿道には応援の人が多く立ち並び選手に声援を送った。



Profile
風見尚さん
「100kmという長距離は私の選手としての適正に合っていたんじゃないでしょうか。東京都出身で現在は妻と東浦町で暮らす。36歳

サロマ湖の大会で優勝のゴールテープを切った。先頭集団のハイペースに食らいつけたことが勝因と振り返る

名門陸上部で鍛錬を積むも挫折の多かった学生時代
身長170cm、体重55kg、飄々とした口調で話す風見尚さん。その姿は100kmを6時間弱で走りぬく、ウルトラマラソン世界記録保持者のイメージからは、ほど遠い。
出身は東京都。両親は共働きで飲食店を営む。小学生の頃、自宅から片道3kmを走り両親の店へ通った。「おかげで長距離走が得意になったんです。それ以外の運動はまったくダメです」と笑いながら話す。

運動が苦手だった小学生時代、人に誇るような好成绩をあげられるのがマラソン大会だったという。実績が自信となり中学校で陸上部に入ると、東京実業高校、さらに陸上の名門駒澤大学へと進む。大学卒業時に陸上部の恩師・大八木弘明監督とも相談し、実業団での競技継続を決意。2006年、大府市の愛三工業株式会社に入社し、陸上部に所属した。

しかし、学生時代を振り返れば全国レベルの大会で入賞はおろか、出走経験もない。「学生時代には勝てなかった同世代の選手に、実業団の舞台でリベンジできたらという思いで社会人ランナーの道を選びました」と語る。

母親に好成绩を届けるべく再び長距離走と向き合う